様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年 １０ 月 ２０ 日現在

機関番号：５４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０２５７

研究課題名（和文）関西文化圏を中心とする江戸時代の紀行文の形成

研究課題名（英文）Formation of Traveller's Journals around Kansai District in the Edo Period

研究代表者
湯城　吉信（YUKI, Yoshinobu）

大阪府立大学工業高等専門学校・その他部局等・教授

研究者番号：９０２３０６１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：「江戸期の漢文遊記の研究一懐徳堂を中心に」に引き続き、江戸時代の大坂人の旅行記を調査した。まず、吉野行の旅行記として、中井蕉園『りゅう碧嚢』と三村崑山『芳山遊草』を紹介した。また、多くの旅行記を残している加藤景範の著作の中から、東と西の旅を伺うことのできる『関東紀行』と『西遊紀行』を紹介した。共に、翻刻、注釈という基礎作業を行った上で、現地調査を行い、その成果を公表した。

研究成果の概要（英文）：The author researched traveller's journals around Kansai area in the Edo period. Yoshino was famous for its marvelous cherry blossoms and the place where people in the Edo period eagered to visit. The author introduced two traveller's journals, Nakai Shoen"Rhuhekinou" and Mimura Konzan"Houzanyuso". And as for traveller's journals to east and west, the author introduced Kato Kagenori"Kantokiko" and "Saiyukiko". "Kantokiko" is a traveller's journal to visit Edo and Mt.Fuji, and "Saiyukiko" is that to visit Kompira Temple in Kagawa and Miyajima Temple in Hiroshima.

研究分野：日中思想史

キーワード：紀行　懐徳堂　加藤景範　中井蕉園　三村崑山　りゅう碧嚢　芳山遊草　関東紀行

１．研究開始当初の背景

江戸時代の文人は多くの紀行文を著しており、文学史の観点からも、歴史学の観点からも、作者の思想を伺う上でも貴重な資料であるが、これまでに紹介されていない資料も多い。

２．研究の目的

江戸時代の関西文化圏、特に大坂の文人の紀行文を分析する。特に、当時の大坂人のあこがれの地であった吉野への紀行を複数取り上げ、比較することによりその特徴を明らかにする。また、多くの紀行を残している加藤景範の著作の中、東への旅を記録した『関東紀行』と西への旅を記録した『西遊紀行』を取り上げ、その旅の様子を再現する。

３．研究の方法

まず取り上げる文献の選定をする。そして、取り上げた文献の解読をし、注釈を施す。さらに、現地調査を行い、現地の現在の様子や古今の変化など、文献調査では確認できない情報を得る。その他、様々な関連文献を調査し、関連情報を集める。以上の調査に基づき、当時の旅の様子、各資料の特徴を明らかにする。

４．研究成果

桜の名所吉野は、大坂人が一生に一度は行きたいと思う土地であった。大坂の漢学塾、懐徳堂の学者も多く訪れ、紀行文を残している。本研究では、その中、中井蕉園『騮碧嚢』と三村崑山『芳山遊草』を取り上げた。蕉園の父、中井竹山にも『芳山紀行並詩』と題する紀行文があるが、前二書の方がより特徴的だと考えたからである。

(1)中井蕉園『騮碧嚢』は、寛政七年（1795）春の吉野行を題材にした紀行文である。赤い袋を意味する『騮嚢』には漢詩が、青い袋を意味する『碧嚢』には漢文が収められている。これは、餞別として贈られた二つの袋に作品を入れていったということに基づいている。

なお、この吉野行の同行者金崎元永の夫人であった蘭窓も『吉野日記』という和文の紀行文を残している（大阪府立中之島図書館蔵）。また、蕉園は『遊芳自導』という自分用に作ったガイドブック兼旅行記録も残されている（大阪大学懐徳堂文庫蔵）。この冊子には、竹山『芳山紀行』の日程を記す他、『大和名所図会』の抜き書きがあり、訪れた場所には赤線が引かれている。その他、泊まった宿屋の名も見える。これらの資料を総合すると蕉園たちの旅の様子を再現することが可能である。また、現地調査の結果を加え、「『騮碧嚢』の吉野行」という論考にまとめた。

『騮碧嚢』には、文才を称えられながら夭折した蕉園の才能と自意識とを垣間見ることができる。父竹山の『芳山紀行並詩』を強く意識し、それを上回る分量の作品を残している。蕉園は病弱で体力にも欠けた。それを人から笑われるがその度に詩を作って反撃している。詩は蕉園にとって大きな発散の手段だったのであろう。

プライドが高い蕉園はえせ文人が許せなかったようだ。三月一日の記述では、如意道人を徹底的にこき下ろしている。如意道人とは、もと伊勢山田の古道具屋で、書画を求めて全国を巡り歩いたという。汚い格好をした如意道人は蕉園を見付けるとしきりに一筆書いてくださいと求めてきた。蕉園はにべもなく断り、以下のような詩を詠んでいる。

如意道人向客誇
眠餐行止皆如意
勝境探春無一詩
笑殺風流不如意

如意道人は、何事も（名のように）「意のままになる」と言うが、このような絶景を目にしても一首の詩も詠めない。風流だけは「意のままにならない」のだろう、というのである。人を軽蔑する点において蕉園は容赦ない。ただ、如意道人も負けてはいない。道人は、蕉園がしたためて店に残していった和歌をはがして持って行き、蕉園の弟子の子発が返すよう言っても応じなかったという。蕉園は以下のように詠う。

春風花半枝
留待黄鸎拠
一鴉何無情
踏破清香去

春風に花が半開き、鶯が来てくれるかと思ったのに、無常な鴉が香りを踏みにじっていった、というのである。

沿道の描写で注目すべきは、奈良の柳本での三方荒神の描写である。三方荒神は上に独り、左右両脇に各一人、計三人が乗れるようにした鞍で、伊勢参りでよく用いられた。名称は、三面の仏像・三宝荒神をもじったものである。蕉園はこの三方荒神の様子を正確に描写した後に以下のような詩を詠んでいる。

羸駒分背両詩身
清苦挟鞍眉数顰
遊勢俗群相指目
看為強病賽神人

痩せ馬が両脇に詩人を乗せ、詩人は鞍を挟んでしばしば眉を顰める。遊興の俗人達はこれを見て、病を押してお参りに来た人だと思うだろう、という意味であろう。喧噪を好む俗人と風雅を好み詩作する自分たちとを対照

的に描いているのである。

(2)三村崑山『芳山遊草』は還暦を迎えた崑山が文政五年（1822）に吉野を訪れた時の紀行文である。ここには、蕉園のような気負いはなく、気の合う知り合いとの気楽な旅を行った様子が素直に表現されている。蕉園や竹山の紀行に見えるような歴史考証は少ない。

現地調査も含めた結果は、「三村崑山『芳山遊草』翻刻・注」にまとめたが、現代語訳がなかったのと、文字化けによる誤植が発生していたので、科研費報告書『関西文化圏を中心とする江戸時代の紀行文の形成』では、現代語訳と翻刻の訂正を追加した。

なお、崑山らは吉野で文人の篠崎小竹と遭遇している（二十四日吉野で、また二十六日長谷寺で）。両者ともに吉野は桜が十分に咲く前だったが長谷寺では満開の桜を目にすることができ満足したことだろう。崑山は以下のような会話を記録している。

崑山「花の多さでは吉野に敵いませんが、花の美しさと大きさでは長谷寺の方が上ですね。私は小魚がたくさんあるより、少なくてもご馳走の方がいいです。」

同行者「それでは、吉野はもう結構ですか。」

崑山「いやご馳走はちょっとで飽きてしまいますが、小魚はいくら食べても飽きません。私がまだ生きておればまたお伴させてください。」

風俗描写で注目すべきは薬墨売りの記述である。二十六日、奈良の宿で、崑山らは薬墨売りに遭遇した。彼は、「私めの薬墨は春日神社の灯籠の煤に二月堂の神水を混ぜ、二十四種もの漢方薬を混ぜております。内臓疾患にも効けば、眼疾にも効きます…」と滔々と口上を述べた。だが、値段安いのでかえってみなが疑い一本も売れずに退散したという。庶民の旅の様子が窺えて興味深い。

懐徳堂で漢学も学んだ歌人加藤景範（号竹里）（1720-1796）は、頻繁に各地を訪れ多くの紀行文を残した。本研究では、その中、江戸、富士山行を扱った『関東紀行』と、讃岐の金毘羅および安芸の宮島を訪れた旅の紀行『西遊紀行』とを紹介した。この二者を取り上げた理由は、東と西への大がかりな旅行だからである。

(3)『関東紀行』は延享二年（1745）秋の江戸行の様子が描かれている。本書は巻物で、和文で書かれた文章以外に彩色画が五幅ある。当時、景範は二十台半ばの若さで健脚を誇ったようだ。往路の中山道は標高差もあったが、付き人とともに苦しみながらも徒歩で山を越えていった様子が描かれている。この旅の大きな目的は富士山を見ることであった。往路、山道に苦しんだ末に、塩尻から初めて見た富士山は格別であったようだ（十月二十日）。その様子を景範は以下のように描写し、画にも残している。

「今日は富士山が見えるでしょう」と言われた日は快晴に恵まれ、私は急いで塩尻を登った。だが、その谷向こうに見えたのは富士山ではなかった。「あの山の向こうだろう」と走って登ったがまた別の山が見える。やけくそになってまた登ったがまた違う。「どういうことだ。いくつ連なっているんだ」と腹が立つ。ちゃんと教えてくれなかった人も憎らしい。でも、心が落ち着かないし、「何重でも来るなら来い」と下部もつぶやいている。峰に上がってみるともう行く手に遮る山はない。見やると、諏訪の湖が間近に、草双紙に見える唐絵のように見える。高い山が取り囲んでいるが、東南の方が空いていて、山並みが続いている先に、白い山が見える。薄墨で線を引いたようにすそは消えて空に浮んでいる。遠くに見えるので小さいが、間違いなく富士山だ。

『関東紀行』で注目すべきは、景範が江戸城に入っていることである。折しも、江戸では九代将軍、徳川家重の即位（国譲り）の儀式が行われていた。その祝いの雰囲気に溢れた江戸城に景範は見物に出かけている。警備が厳しい江戸城を庶民が見物することは基本的にあり得ないはずだが、記述をそのまま信じれば、宿の主人を頼って、景範は江戸城に入り、そのあでやかな襖絵の様子などを描写している（十一月二日）。

(4)『西遊紀行』は明和三年（1766）春の金毘羅・宮島行を記録している。懐徳堂学主三宅春楼が讃岐の弟子を訪ねるのに同行した旅であった。春楼と讃岐の繋がりは父石庵にまで遡る。当時の学者がどのような交流を持ったのか知る上で貴重な資料である。

旅は、三月十四日から四月二十一日に渉る長旅であったが、その間ずっと門人の世話になっている。地盤のあった金毘羅、大野原は言うまでもなく、途中の山陽道においても門人の世話になっている様子が描かれている。そして、讃岐では歓待への返しとして、『論語』を講義したり（三月二十九日、四月十四日）、書を与えたりしている。

宮島へはもともと讃岐の木村氏たちと行く予定にしていたが、明和三年の津軽地震の影響で讃岐の人たちが行けなくなった。先立つ明和二年、甲斐川で水害が起き、その復旧工事に津軽藩が駆り出されることになっていた。だが、翌明和三年、津軽地震が起き、津軽藩が被害を受けたので、それが免除され、丸亀藩にお鉢が回ってきたのである（四月一日の記述）。

宮島へは讃岐から船で行った。貸し切りの船で旅行するというのは現代から見れば随分贅沢な話で、当時も景範たちだからこそ可能だったのであろう。ただ、彼らの旅行中、概して天候は悪かったようで、しけや潮待ちでしばしば足止めを食らった様子が描かれている。まだ寒い時期に苫を懸けただけの船

で雨に遭うことはかなり苛酷だったであろう。
　この紀行で注目すべきは、金毘羅、宮島という現在も有名な場所以外にいくつかの場所を訪れている点である。例えば、闘龍灘（三月十八日）、石の宝殿（三月二十日）、井関滝（四月一日）などである。闘竜灘や生石神社石の宝殿は今でも知る人ぞ知る場所だろうが、井関の滝はほとんど知る人はいないであろう。これは、讃岐の大野原に現存するが、現在で言うダムの放水路である。現在もその姿を目にすることができるが、岩を彫っているため自然の滝かと見まがうほどの迫力と景観美がある。
　なお、個人的な話ながら、瀬戸内海の弓削島に住んだことのある私は、彼らが弓削にまで寄っているのは新鮮であった（弓削は神戸大学海事博物館蔵『東西船路名所記』天保九年(一八三八)刊にも航路として記されている）。
　また、風俗描写で注目すべき点として、闘竜灘における漁の様子の描写（三月十八日、十九日）や大崎下島御手洗における遊女の描写がある（四月八日）。前者については、鮎を捕る子どもたちから鮎を買い取る様子が注目される。後者については景範は彼女らの境遇に思いを馳せ同情している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①湯城吉信、中井蕉園『駘碧嚢』の吉野行（上）、上方文化研究センター研究年報、査読有、15号、2014、pp.23-40。

②湯城吉信、三村崑山『芳山遊草』翻刻・注、大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要、査読無、48 号、2014、pp.27-36。

③湯城吉信、加藤景範『関東紀行』翻刻・注、大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要、査読無、49 号、2015、pp.29-42。

④湯城吉信、加藤景範『西遊紀行』翻刻・注、関西文化圏を中心とする江戸時代の紀行文の形成(平成 25～27 年度科学研究費補助金研究成果報告書) 、査読無、2016、pp.87-118。

⑤湯城吉信、中井蕉園『駘碧嚢』の吉野行（下）、上方文化研究センター研究年報、査読有、16号、2016、pp.1-27。

〔学会発表〕（計１件）
①湯城吉信、中井蕉園『駘碧嚢』について、懐徳堂研究会、第 16 回、2014 年 6 月 29 日、大阪大学

〔図書〕（計１件）
①湯城吉信、関西文化圏を中心とする江戸時代の紀行文の形成（平成 25～27 年度科学研究費補助金研究成果報告書）

〔その他〕
ホームページ
http://www.ct.osakafu-u.ac.jp/~y_yuki/

６．研究組織
(1)研究代表者
湯城　吉信（YUKI, Yoshinobu）
大阪府立大学工業高等専門学校・教授
研究者番号：90230614